

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

ヤスィックアケルの奮い空 23

砂漠のオアシスホータンへ

8月14日、登山行動は完全に終了した。観光モードにスイッチが切り替わる。今日は、ホータンへ向かう。僕にとっては、この道は5回目。ところが、イエチョン（カルギリク）を出てすぐに道が去年と違うことに気がついた。去年は、あちらこちらで洪水の被害があり、寸断されていたが、その道ではなく、高速道路になっているのだ。高速は去年はまだ建設中で、ところどころ造っているという趣で、このペースではいつ完成するやら・・・と去年は思っていたのだが、なんとこの一年の間にイエチョンとホータンの間は完全に開通したとのことだった。緑色の交通案内や80km制限の標識、地名の看板なども随所にある。砂漠を通る一直線の道故、昨年通った旧315号国道（西域南道）がほとんど並行して走っているが、そちらはいわば見捨てられた道。去年の洪水の後始末が終わっておらず、道が砂に覆われたままのところもある。しかし、知らない人が見たら、それは単なる砂の堆積丘くらいにしか見えず、それが洪水により埋められた道とは気づかないことだろう。去年は冠水したり、道路脇を行き場を失った水が流れたりしていたが、もちろん今年は水はない。しかし、何年かに一回とはいえ、この砂漠は竜のたうち回ったようなあとを残して水が縦横無尽にこの大地を飲み込むのだ。そして、その頻度はこの数十年で回数が増えているのは間違いない。現に僕は2000年に訪れた時には100年に一度の洪水だと言われ、去年は10年に一度の洪水だと言われるような砂漠の洪水に出会ってもいるのだ。信じられないことだが、水がないはずの砂漠の洪水がこのところ頻発しているのは事実である。というわけで、この新しい高速道路は、その何年かに一度起こるかもしれない大水に備え、随所に取水堤防が築かれ、集められた水が道路下を流れるように工夫してあった。砂漠の道路が押し寄せてくる水の前では無力であることは、昨年実際に目の当たりにしたところだが、少しはその経験を活かした治水、道路建設が行われているようである。

イエチョン、ホータン間は280km。快適な道路をひた走り、わずか2時間40分ほどでホータンに到着した。経済特区に指定されたホータンは、ウルムチからの鉄路も今年開通、インフラの整備が急ピッチで進んでいる。ホータンを訪れるのも5回目だが、いずれの時にもお世話になっている「ホータン賓館」が今回も我々の宿舎である。ここに連泊になるので、改めて山での汚れ物をすべて洗った。カシュガル以来となるバスタブに身を沈めると心地がついた。洗濯を干し終わり、一休みしているところへ、ホータン人で旧知の友人アイレットさんが僕らの到着を聞きつけて訪ねてきた。お疲れモードのヌルさんに代わって、ホータンでの観光ガイドを買って出てくれた。アイレットさんは2000年のカシタシ主峰登山隊で訪れた時、都合のつかなかったヌルさんの代わりに、僕らの通訳をしてくれた。ホータン師範大学の数学の教師だが、愛知教育大学に留学したこともあり、日本語にも通じていて、時々アルバイトで日本人ガイドをしている。2005年からはその仕事もあまりしていないということだったが、僕らの遠征が通訳としての初めての仕事だったこともあり、それ以後も特別な親近感を持ってつきあってくれ、僕

がホータンを訪ねた時は、いつもボランティアで案内してくれる。「入山前の7月19日、ホータンの暴動のニュースが流れたが…」と尋ねると、「あれは民族対立などではなく、単なる喧嘩の延長のようなもの、マスコミがニュースをでっちあげている。」と一笑に付き、ひとしきり持論をぶちあげた。

ホータン観光その1

アイレットさんが言うとおりの、実際のホータンは僕がこれまで接してきたホータンと変わりはない。ただし、ここ10年の町の変貌ぶりはそれとは別問題だが……。折良く今日8月14日は日曜日。カシュガルでもそうだったが、日曜バザールの日である。早速バザールへ出かけると、ラマダン中の余波で、飲食関係の店や屋台は店を開いていないところが多いのでいつもに比べればやや静かだった。それでも、はじめて新疆を訪れた松田、佐藤、三戸呂の3人はこの西域独特の喧嘩状態には興味津々。やれ生きたままの鶏がいたのだ、蜜蠟をみつけたのだ、なんだと思ったら石けんだったとか……。焼きたてのナンをほおぼりながらウイグル帽の値引き交渉に興じていたり……。次から次へと展開するシルクロードの熱気と活況に興奮気味。いくらでも決して飽きることはない。

アイレットさんお決まりのルートでひとしきり案内してもらった後、友情の印にと連れて行かれたのが彼の行きつけのラグ麺屋。昼飯はホータン賓館のフルコース、バザールでのナンと羊肉の肉まんの食べ歩き。腹は一杯である。しかし、友情の印には応えねばならない。そして、そのラグ麺が美味しいので、控えようと思ってもついつい食べてしまうのだ。そして、そのままホテルに帰って夕食。山から下りて身体が欲していることも確かだが、このままでは「豚街道」まっしぐらだ。腹ごなしをかねて、食後他の隊員たちを誘ってホータンの町をぶらぶら散歩した。

ラマダン中の夜の町は賑やかである。解放広場などの繁華街に近いところは、断食が終わって家族の団らんを楽しむ姿が見られた。

全国高体連常任委員会

故あって、今期から全国高体連登山専門部の中地区選出の副部長をお引き受けすることとなった。私には荷が重い役職ですが、引き受けた以上は責任を果たすべく頑張る所存です。色々な面で関係各位のご協力・ご支援をお願いしたい。さて、その初仕事となる秋の常任委員会が11月25、26の両日奈良県の橿原市で行なわれた。

青森インターハイの総括を中心に盛り沢山の議題を議論した。特に議論が白熱したのは、「パーティ行動」中の審査の問題であった。パーティ行動は従来の解釈では、監督同行、引率のもとでの行動を指したが、今回の「パーティ行動」は監督とは別行動で審査をするというものであった。このことに関する審査委員会の見解は「体力は見るが、決してタイムレースではない。そこでは通常と同じ内容の審査をした。」ということであったが、そのことへの疑義がいくつか意見として出された。規定時間の設定や追い抜きの際の説明不足などが実際に参加した選手や監督に、タイムレースではないかという憶測を生み結果として事故を起こしかねない状況も生み出したようである。次年度も安全を配慮した箇所と同様な審査が行なわれることになるが、これについては、行動についての名称、定義を始めとして、審査委員会としてきちんと対応することが確認された。